

## イカルスの尻尾

じゃわていー

先生。こうしてお手紙を書くのも何度目になるのでしょうか。何度も相談に乗って頂けて、本当に有り難く思っています。毎回このように書いていると信じてもらえないかもしれませんが、本当に、そう思っているのです。

今日ご相談したいのは、他ならぬ私のことです。今迄書こう、書こうと思ってもどうしても書けなかった、私自身整理できていない、悩み……。これを聞いて頂きたいのです。明確な答えを期待しているわけではないのです。聞いて頂けるだけで。それだけでいいのです。

先生。どうか、最後までお付き合い下さい。

◆

私には友人がいました。友人……。彼女はそう思っていなかったかもしれませんが。いいえ、きっと思っていなかったでしょう。けれど私にとっては友人だったのです。彼女は、あまり目立たない、一人でずっと本を読んでいるような、そんな人でした。いつも友達と一緒に話をして休み時間を過ごしていた私とは対照的で、たまに視界に入ったときには、ああ、あんな人もこのクラスに居なと、ちらと思うくらいに存在感がなく、そして私とはその程度の関係でした。

彼女に惹かれるようになったのは、ある放課後のこと。忘れ物を取りに教室に戻ると、西日差し込む人気のない部屋で、彼女、タカノさんが委員長に詰め寄られていました。私は思わず扉の影に隠れました。

「ちよつとどういう意味よ、タカノさん。私に期待してないって」

「別に……。どうだっていいでしょう。貴方に理解できるとは思えないし」

意外でした。彼女はとても鋭い眼をして委員長を睨んでいて、攻撃的な口調で、声音で……。

委員長は高圧的な人で、怒らせると非常に厄介だとクラス中に知れ渡っていました。徹底的に、感情的に自分の意見を押し通そうとするのです。そのためクラスで敵対的な態度を取る人は居なくなっていたのですが、このときの彼女はそうではありませんでした。私はその様子に、ひどく興味を惹かれたのです。

「へえ……。私にはわからないっていうの。それはあなたの説明能力が欠如しているだけじゃないのかしら？」

「あなたのその認識の狭さを言っているの。全てを理解できる気でいて、相手に説明を求める、それ

はいいわ。でもあなた——、自分の知識が足りずに理解できない可能性を考慮していないでしょう？　そもそも平易に説明するというのは、瑣末な情報を削ぎ落として一般的な知識のアナロジーとして説明することに他ならないわ。あなたがやっていることは、あらゆる認識を自分の常識に押し込んで理解した気になっているだけ……。それにすら気付いていないのでしょうか？」

委員長は、得意顔で投げた質問へ饒舌な反論と批判を加えられ、グラデーションを描くように顔を赤くさせて。

「あ、あなたに私の何がわかるっていうの……！　いつも本を読んばかりで、ろくに人付き合いもしていないくせに！」

何の捻りもない言葉。委員長は、なんというか、それ程語彙の多いほうではありませんでした。急速に高まっていく緊張感。それなのに、話が噛み合っていないということは辛うじて私にも理解できました。タカノさんはそれを承知の上で話を続けていたようで、——その意図はどこにあったのでしょうか？

「ああ……。安心していいわよ。私はもう学校をやめるつもり。私が本を読んでいるのは、もうここでやるべきことが殆ど無いからなのよ。学ぶものが無くなったのではなくって、私にとって価値がないだけの話」

話題の飛躍に付いて行けず、委員長は困惑の表情を通り越して侮蔑するような眼で、タカノさんを見ていました。理解できないということをやうやく理解したのかもしれない。そのとき、不意にタカノさんの眼がこちらを向いて、

「貴女ならどう思うかしら。私達の生き方の違いについて、貴女の意見を聞きたいわ」

彼女はこちらを振り向きながら言いました。私は咄嗟に返事ができず、変に上擦った声で返事をするのがやっと……。だって私、何の話をしているのかさっぱりわからなかったのです。委員長は私の存在に少し驚きながらも態度を崩さず、自分の優位を信じ切っている様子でした。

「急に話しかけてごめんなさい。今答えなくたっていいのよ。ゆっくり考えて。そして私に教えて」

慌てる私を、煌きを放つ瞳で真っ直ぐに見つめ、彼女は薄く微笑んだのです。意外にも紅い唇が、優雅なカーブを描いていました。華美なルージュの紅ではなく、控え目な、けれど血潮を内に秘めた抑制的な、紅……。

先生。このとき彼女が何故私に話かけたのか、何故私に微笑みかけたのか、今でもわかりません。私は今も考え続けています。彼女が委員長に語った話。それは本当に委員長に向けたものだったのでしょうか。



その後、宣言通り彼女は学校に来なくなりました。委員長は不自然な程に彼女のことには触れず、クラス全体に箝口令が敷かれたかのような有様でした。私は彼女のことをなんとなく忘れることができず、ふとした時に彼女のことを、彼女の言ったことを、考えるようになっていました。生き方の、違い……。そんなぼんやりとした日々の中でした。突然、彼女から連絡が来たのは。

先生。私は彼女に連絡先なんて教えていないのです。私の連絡先を知っている人と彼女の間で親交があったとは、とても思えませんでした。どのような手段で調べたのでしょうか……。けれどそんな不審は小さなもので、私はまるで何かに操られるようにして、進んで彼女と会う約束をして、それから度々、駅前の喫茶店で話をするようになったのです。連絡はいつも彼女から、番号非通知で。

彼女は私に「意見を聴きたい」と言ったことなど忘れたように、一方的に話をして、私の顔を暫く見つめ、それでいて私に明確な回答は求めず去っていく。そんなことが、何度かありました。

「私にはね、人生なんてどうでもいいの」

そう彼女が呟いたのは、冬にさしかかり、初雪の降った次の日のことだったでしょうか。

「快楽主義、と言ってもいいのだけれど、一般的な意味とは少し違うかもしれない」

私の向かいに座る彼女は何時になく柔かな眼差しで、道の名残り雪を眺めていました。薄汚れた白。彼女は珈琲を一啜りし、一呼吸置いてから続けました。

「人生に意味なんて求めていないし、楽しければいいと思う。けれど——単に快楽を貪っても、どこか不快なの。私にはこれが許せなかった。どうしてそんな感情が芽生えるのか……。だから私は、私自身をクリアにするために、人生を最適化することにしたの。私の求めるもののために」

「けれどそれで、単純になんて全然ならないの。解の分かっている問題なら、そこまでの道筋はすぐ決められる。けれど答はすぐ其処にあるかもしれないし、遥か彼方にあるのかもしれない。可能性の問題で言えば、あらゆる場所に答が有り得る。極端な話、重複を除いて無駄なものなんて殆どないのよ。こうして貴女と話をしているのだって」

彼女は不意に私の眼を見て、そう言いました。彼女は私との会話に、意味があるかもしれないと言いました。けれどそれは裏返しに意味がないかもしれないということです。そのことに気付くと、私は胸が苦しくなりました。

「私の目的はとても単純なのに、実際はとても難しい。自らの求めるものを探しながら自らが変化し

ていくわけだから、当然答えは単純な、固定のものでは有り得ない。流動的な何か、というより流動的なものを説明する何か。思想と言ってもいいし、アルゴリズムと言ってもいい。何にしろ、私という個人を未来にまで渡って記述する何か、であるのでしょうか。それがわかったところで得をするのは、きつと私だけだけれど。――殆どの物事って、そういうものよね。自分のためにならないのにやりたいことなんて、あるかしら？」

私は今迄、自分のためにどれだけのことをしてきたのでしょうか。私にとって、意味のある、こと……。

「学校も辞めたし、貴女には想像も付かないような悪いことだつてしてきた。辛いこともあった。……本当よ？　けれど私、後悔はしていないし、とても楽しい。とても満足してるの。いいえ、満足していない。だからこそ、満足しているの。――言っていること、わかるかしら？」

彼女はとても幸福そうに微笑んで、そう言ったのです。二度目に見る、彼女の笑顔でした。道の名残り雪は、道ゆく人に踏み占められ、陽の光に照らされ、透明になって消えてしまったようでした。

彼女からの連絡は、それから来ていません。



先生。彼女は私に何を伝えたかったのでしょうか？ 彼女は私に何を望んでいたのでしょうか？

私、彼女にまた逢いたいとか、彼女の考えを理解したいとか、そういうことに拘っているわけでは、決まてないのです。ただ彼女の中に見てしまった煌き……。遠くを見ながら近くを見ていて、諦めているようにでいて希望に満ちている。そんな矛盾した在り方を、美しいと思ってしまったのです。その煌めきを、私も持ちたい。そう思ったのです。

これはいけないことでしょいか？ これから私は、多くの人とは違う道を歩んでゆくつもりです。けれどこのような手紙を書いていること……。甘えていると、詰って下さっても構いません。けれど私には、まだ自信がないのです。彼女のような自信が。

先生。親愛なる、先生……。